

スカンジナビアのアーサー王*

黒 田 享

本稿では研究資料として古スウェーデン語によって書かれた叙事詩「騎士イヴァン(Herr Ivan)」を紹介する。ストーリーは Chrétien de Troyes の *Yvain* に重なるので、よく知られているとは思いますが、筆者の知る限り邦訳はまだなされていないので、まず最初にこの作品について簡単に述べ、その後作品の一部（第一章から第七章まで）を紹介したい。

作品

Herr Ivan はスウェーデン文学史において一般に「エウフェミアの歌(Eufemiavisorna)」と呼ばれる三つの叙事詩（「騎士イヴァン(Herr Ivan)」、「フロレスとブランセフロール(*Flores och Blanzeflor*)」、「ノルマンディ公フレデリック(*Hertig Frederik av Normandie*)」)のひとつであり、スウェーデン語で書かれた最も初期の長編文学作品である。

作者についてはわからないが、作品成立の背景と成立年については本文 6431 行以下から窺い知ることができる。

Tha thusand vinter, thry hundradh aar	千の冬と三百の年が
fran gudz fözlo lidhin var	神の生誕から流れ
ok ther til thry, ij thän sama tima	さらに三年が加わった、そのときに
vardh thässe bokin giordh til rima,	この書は歌にされたのです。
Eufemia drötning, thet maghin ij tro,	王妃エウフェミアさまが、本当に
lät thässa bokena vända swo	これらの書の訳をお命じになったのです。
aff valske tungo ok a vart maal —	異国のことばよりわたしたちのことばへと—
gudh nadhe the ädhla frugho sial —,	神さま、この高貴な方の魂に御恵みを—

* 本稿は筆者が文部省在外研究員として 2000 年から 2001 年にかけてフィンランド共和国 Åbo Akademi 大学において行った研究成果の一部である。

ther drötning ower Norghe var
medh gudz miskund thrättan aar.

ノルウェー国の王妃として
神さまの慈悲を三十年の間受けておられ
したお方が。

この箇所を見る限りこの作品が 1303 年にノルウェー王妃 Eufemia の命によって - スウェーデンでなく、ノルウェーの王妃であったにもかかわらずなぜ作品がスウェーデン語で書かれているのかという疑問はやはり残る（スウェーデン語版に先立つノルウェー語版もあった¹ という推測もある）が - 成立した作品であると理解できる。

ストーリーは上記の通り基本的に当時のヨーロッパ宮廷で広く受容されていた Chrétien de Troyes の *Yvain* と重なっており、作品の長さもほぼ同程度である（Chrétien は 6808 行²、*Herr Ivan* は 6818 行）。しかし、Håkon den gamle の命により作られたとされる古ノルウェー語散文の *Ívens saga* と表現が重なる部分も多く見られ、言語的に近い関係にあるこちらの作品との関係もまた深いと考えられる³。一部では同様に *Yvain* に基づく Hartmann von Aue の *Iwein*（中高ドイツ語）も下敷きになっているとも言われている⁴が、筆者の見る限り *Herr Ivan* よりも心理描写に大きなスペースが割かれ、作品の規模もはるかに大きい⁵*Iwein* との関連はそれほど明確とは思えない。

翻訳

本稿の大部分は *Herr Ivan* の翻訳になるが、本稿ではあくまで文芸的価値よりも研究資料的価値を優先させる翻訳法を採ることにした。

作品が書かれた古スウェーデン語と日本語の間の構造的な違いはあまりにも大きく、作品としての読みごたえや内容の再現を優先するならば原文の語順や

¹ *Herr Ivan*. Kritisk upplaga. Utgiven av Erik Noreen. Samlingar utgivna av Svenska Fornskrift-Sällskapet (1931) 第 3 巻 VI 頁参照。

² Les romans de Chrétien de Troyes. Édités d'après la copie de Guiot (Bibl. Nat. Fr. 794). IV: Le chevalier au Lion (*Yvain*) (1975) に従った行数。

³ *Herr Ivan*. Kritisk upplaga. Utgiven av Erik Noreen. Samlingar utgivna av Svenska Fornskrift-Sällskapet (1931) 第 3 巻 V 頁参照。ちなみに *Ívens saga* の校訂版としては *Ívens saga*. Edited by Foster W. Blaisdell. Editiones arnamagnæanæ (1979) が参考として挙げられる。

⁴ *Svensk litteratur I*. Utgiven av Bernt Olsson (1993) 74 頁参照。

⁵ *Iwein. Eine Erzählung von Hartmann von Aue*. Herausgegeben von G.F. Benecke und K. Lachmann, neu bearbeitet von Ludwig Wolff. 7. Ausgabe (1968) に従えば 8166 行になる。

各詩行の前後関係を犠牲にした形での散文訳しか方法はありません。しかし、資料的価値を優先するのであればそういった情報は可能な限り尊重されなければならない。本稿では逐語訳とまでは行かなくとも、できるだけ忠実に原文の詩行の前後関係を再現するよう試みた。ただし、その結果文意や語りの流れがかえってわかりにくくなってしまった部分も多いことは否定できない。とは言え、句読点や各詩行内の語順、韻律構造あるいは各詩行の長さまで目を配ることようなことはしなかった。原文と訳文の間に横たわる言語構造の違いがあまりにも大きく、それを克服するための労苦に見合うだけの実りが得られるかが確かでなかったためである。また、翻訳であるため、ある程度は「時代がかった」文体になることは避けられないが、特に意図的にアルカイックな文体を用いることもしなかった。そもそも原文で用いられている文体が同時代の受容者にとってもアルカイックなものとして聴こえていたかは我々には判断できないことである。このあたりは訳者によりいろいろな判断基準があるところだろう。

底本

翻訳の底本としては Erik Noreen による校訂版⁶を使った。翻訳の章立ても Noreen に従っている。ただし、各章のタイトルは訳者が便宜上付け加えたものである。

Noreen 版の記述によれば、*Herr Ivan* には 6 点の写本が現存している。Noreen がもっとも重視したのはその中でも一番古い（おそらく 1400 年代初め成立）写本 A（Cod. Holm. D4、ストックホルム王立図書館所蔵）である。

Noreen の校訂は基本的にこの写本を忠実に再現しながらも、写本の異同に配慮し、作品の全体を再構築する（それゆえ表記や語形変化のばらつきは規範化されないままになっている）というスタイルに従っている。ただ、ところどころ欠落行（おそらく Noreen が判断を控えた箇所）が見られるので、その部分は写本 A に従った翻訳で補うことにした。

また、Noreen 版よりも古いのが、唯一の古スウェーデン語の本格的な辞書である K.F. Söderwall による *Ordbok öfver svenska medeltidsspråket* では *Herr Ivan* からの用例の原典として J. W. Liffman と George Stephens による校訂版⁷が用

⁶ *Herr Ivan*. Kritisk upplaga. Utgiven av Erik Noreen. Samlingar utgivna av Svenska Fornskrift-Sällskapet (1931)

⁷ *Herr Ivan Lejon-riddaren*, en svensk rimmad dikt ifrån 1300-talet, tillhörande sago-kretsen om

いられている。この二つの校訂版のテキストにはかなり大きな違いもあるが、Söderwall の辞書を利用するときの参考として斜字体により Liffman/Stephens 版の行番号も併記した。

翻訳には同じ Noreen 版に基づく Sigurd Kvaerndrup による現代デンマーク語訳⁸も参考にした。ただし、この翻訳はおそらく唯一の現代語訳ではあるが、北欧語史を学ぶ学生向けに作られた参考書としての性格が強く、原文の性格がそのまま残っている部分があることを書き加えておきたい。

騎士イヴァン

第一章 (前口上)

N	L/S	
1	1	父と子と聖霊の名において
2	2	思いを込めて
3	3	古の歌を御披露いたします。
4	4	お耳をお貸しいただける方々にお愉しみいただけるように。
5	5	二方の尊きことこの上なき王について、
6	6	人が語ることが決して絶えなかった二方についてでございます。
7	7	それはカール帝とアルトゥス王。
8	8	共に心正しく、誉高くあらうと心がけられました。
9	9	アルトゥス様はイングランドの王であられました。
10	10	剣と炎でローマに打克ち、
11	11	イングランドの誉高き帝となった方でした。
12	12	イングランドを艱難と
13	13	税（それはローマ人たちがかつて課したものでした）より救い、
14	14	それ以降王を脅かそうとする者はいなくなったのでした。

Konung Arthur och hans runda bord. Efter gamla handskrifter af J. W. Liffmann och George Stephens. Samlingar utgivna af svenska fornskrift-sällskapet (1849)

⁸ *Hr. Ivan, Løveridderen: en hovisk roman fra middelalderen*. Efter Erik Noreen kritiske udgave (1931) af håndskriftet Stockholm D 4 / sprogligt bearbejdet og kommenteret af Sigurd Kvaerndrup. (1971)

- 15 15 もうひとかたはフランスの大カール帝。
16 16 本当のことを申し上げますが、
17 17 キリスト者のために異教徒と戦を交えようなどという
18 18 勇敢な方はそのころ他にありませんでした。
19 19 私が語っております両王については
20 20 その行いによって
21 21 賞賛が世界中に広まっております。
22 22 騎士や諸侯が立ち寄る宮廷であればどこにでも。
23 23 諸王の子息たちがこの両王の居城を訪れたものでありました。
24 24 諸公、執権たち、諸伯がこの両王にお仕えしておりました。
25 25 騎士の子息たちもやはり同じようにいたしておりました。
26 26 そしてこの両王に近づけた全ての者もです。
27 27 この誉れ高きアルトゥス王の御時世に
28 28 強き者と見られたのは、自らの命を賭することができる者だ
しったのです。
29 29 騎士道と貴婦人の名誉のためにです。
30 30 悲しむべきかな、今ではもはや稀になりました。
31 31 貴婦人の誉れのために榮譽を勝ち得ようとする者は。
32 32 そのような者はなかなか見つかりません。

第二章 (宮廷での宴)

- 33 33 ひとつの歌をご披露したく思います。
34 34 それについて私は黙しておれません。
35 35 一人の騎士についての歌でございます。その騎士は誠にかけ
してこの上なき者として
36 36 そのころ知られておりました。
37 37 その騎士はアルトゥス王に仕えておりました。
38 38 日々王の居城にてでございます。
39 39 アルトゥス王は申しあげました通り
40 40 どんな候にもまして宮廷を大事にしておられ、
41 41 そのころ、

- 42 42 それはそれほど昔ではありませんが、宴を催されておりました。
- 43 43 それは喜びに満ちた宴で、聖霊降臨祭の時のことでした。
- 44 44 そこでは貴婦人たちも乙女たちも朗らかな気持ちでおりました。
- 45 45 騎士たちも小姓たちが貴婦人たちと乙女たちを喜ばせるために
- 46 46 槍試合や騎馬試合でくんづほぐれつしておりましたが、
- 47 47 王は充分に食事を取ったご様子で陽にあたっておられました。
- 48 48 それはカリドールのご居城でのことでした。
- 49 49 貴婦人たち、乙女たちが充分に食事を取り、並んで腰を下ろ
しすと
- 50 50 騎士たち、小姓たちは婦人たちに楽しい時を過ごしてもらお
うと
- 51 51 さまざまな心弾むお話をされ、
- 52 52 実にたくさんの方が話題にされることとなりました。
- 53 53 婦人たちが導き手であるところの恋のさまざまな形について。
- 54 54 勇敢な心の持ち主に違いないことでしょう、
- 55 55 貴婦人がたが仕え人として求め、
- 56 56 心から愛しく思うような者は。
- 57 57 私としてはとりわけ冒^{エーヴェンチュール} 険に関わることを書きたいと思
しっております。
- 58 58 貴婦人たちがかつてどんな楽しいことをしていたとしても。
- 59 59 すでに申し上げた通り王は充分食されたので
- 60 60 何も申されず、腰を下ろし、口をつぐんでおられました。
- 61 61 王が心中なにをお考えであったのかは
- 62 62 御本人しかわからないところでした。
- 63 63 王は立ち上がり、寝所へと向かわれました。
- 64 64 他の者たちはみな宴席に留まりました。
- 65 65 騎士たち、小姓たちは不思議に思いました。
- 66 66 王がそのようなことをすることはあまりなかったからです。
- 67 67 お妃様も同室されました。
- 68 68 お妃様は気高く、若さにあふれ、雅な方でした。
- 69 69 その間城外にいた騎士たちは
- 70 70 ー どんな冒^{エーヴェンチュール} 険が彼らを待ち受けていることでしょう ー
- 71 71 セグレモルスとワレワン、

72 72 カーレグレワントと騎士イヴァン、
73 73 皮肉屋の騎士ケイエ
74 74 （騎士ケイエは誰でも悪く言わずにいられない性質でした）
75 75 などの騎士たちで、
76 76 よりいっそう楽しくやっておりました。
77 77 騎士の一人はカーレグレワントといい、
78 78 自分の冒^{エーヴエンテュール} 険談を正直に語り始めました。
79 79 彼の榮譽と言うよりも恥になる話だったのですが。
80 80 それゆえカーレグレワントはひどく悔やむこととなります。
81 81 自らの冒^{エーヴエンテュール} 険談を語ったことを。
82 82 その冒^{エーヴエンテュール} 険談は自分でも恥だと感じていたものだったの
Lで。
83 83 お妃様が近くにやってこられました。
84 84 そして遠からぬところに立ったまま耳を傾けておられました。
85 85 誰も気づかなかったのですが、
86 86 ただカーレグレワントだけがお妃様がそこへやってきたと気
Lづきました。
87 87 この貴き、美しく、優れた騎士は
88 88 すぐさま立ち上がりお妃様に敬意を示しました。
89 89 騎士ケイエはこのことでカーレグレワントをなじりました。
90 90 他に言いようを知らない性質でしたので。
91 91 「貴殿は我々すべてよりも作法に長けておられる。
92 92 だから騎士の呼び名を受けたのだ。
93 93 国の内外を探しまわっても
94 94 貴殿のごとき戦士はいない。
95 95 お妃様もそうお考えでしょう。
96 96 お妃様は誰よりもご立派なお方なのですから。
97 97 いったいどこへ行ったらこれほど
98 98 頼りない戦い手を見つけることができると言いましょう。」
99 99 騎士ケイエはさらに続けました
100 100 「とくと申し上げておきましょう。
101 101 作法に関して我々はみな疎いのです。
102 102 ひとりカーレグレワント殿を除いては。」

- 103 103 「ケイエ殿、そうおっしゃるな。
104 104 ここにおられる方で未来がわかる方はおられません。
105 105 我々はお妃様に気付くのが遅すぎたのです。
106 106 一同面目なく思っているのです。」
107 107 そしてお妃様もケイエにおっしゃりました。
108 108 「あなたの心は今ごろ引き裂かれていたところでしょう、
109 109 あんな皮肉をさっき言っておかなかったら。
110 110 私たちが今みな聞いたような皮肉を。
111 111 あなたはみなに皮肉で応じ、
112 112 結局損をしたこともたびたびだったでしょう。」
113 113 騎士たちは懇願しました。
114 114 「お妃様、お腹立ちにならないでください。
115 115 ケイエ殿はお妃様にお仕えするためには何でもするつもりで
しはいるのですが、
116 116 皮肉だけはやめられないのです。」
117 117 「私は思うのですが、私が申したことで
118 118 口にしない方がよかったとことはありません。
119 119 何人たりと他の者に皮肉を言わずに、
120 120 好意と榮譽を互いに与え合うべきなのです。
121 121 ですから、私たちはここで口をつぐみ、
122 122 カーレグレワントの冒^{エーヴェンテュール} 険談を聞きましょう。」
123 123 カーレグレワントは言いました。「おわかりかな、
124 124 ケイエ殿、私の話に耳をお貸しくださるなら、
125 125 私は争うつもりはありません。
126 126 どれほど不要なことを申されるとしても。
127 127 私に対して皮肉と嘲りを申されても、
128 128 ご自身が恥をかくだけです。
129 129 貴殿は私に害をおよぼすこともありませんし、
130 130 といって益になることもおできになりません。
131 131 貴殿は全ての者にも恥を与えました。
132 132 貴殿のが撒かれたあらゆる悪意によって。
133 133 ですので、私が望むのは、
134 134 貴殿が私を放っておかれることです。

- 135 135 私の冒^{エーヴェンテュール}険についてこれ以上申し上げるつもりはござい
しません。
- 136 136 お妃様、お願いでございます。口をつぐむことをお許しくだ
さい。」
- 137 137 騎士ケイエはそこで続けました。
- 138 138 「お妃様、どうでしょう、
139 139 カーレグレワントツ殿の冒^{エーヴェンテュール}険談をお聞きになるというの
しは。
- 140 140 この優れた騎士に望まれてはどうでしょう、
141 141 冒^{エーヴェンテュール}険談を語れと。
- 142 142 我々一同それを聞きたく願っておりますし。」
- 143 143 お妃様は騎士カーレグレワントツに言いました。
- 144 144 「過ぎたことは水にお流しなさい。
- 145 145 ケイエ殿のことなど気にしなければ良いのです。
- 146 146 ケイエの悪口など少しも取りあってはなりません。
- 147 147 それを恥に感ずることもないのです。
- 148 148 お願いですから、冒^{エーヴェンテュール}険談を始めなさい。」
- 149 149 「お妃様、本当はやめておきたいところなのです。
- 150 150 余りに難儀なことなのでございます。
- 151 151 この冒^{エーヴェンテュール}険談をここで語ることは。
- 152 152 しかしお妃様のお望みとあればいたしかたありません。
- 153 153 他の皆様もお聴きください
- 154 154 私が語ることを。
- 155 155 知恵と心でお考えください、
- 156 156 騎士、貴婦人、りっぱなご婦人の皆様がた。
- 157 157 私に起こったこと、それは夢ではありませんし、
- 158 158 まだまだ忘れられないのです。」

第三章

(カーレグレワントツの冒^{エーヴェンテュール}険談)

- 159 159 「まだ先だって、おこったばかりのことですが、
- 160 160 私は馬を駆り、珍しいできごとを求めて旅をしていました。

- 161 161 全身非の打ち所なく武具に身を固め、
162 162 私と一戦交えようと言う者がいないか探しておりました。
163 163 右手に一本の道を見つけました。
164 164 その道は他国に通じるものでした。
165 165 その道は馬で行くには難儀な道で、
166 166 暗く、細く、きつい坂がありました。
167 167 その道を行くと広い野原を通して
168 168 とあるたいへん立派な城に辿り着きました。
169 169 辺りを囲む堀は広く、
170 170 誰も飛び越すことなどできないほどでした。
171 171 堀の上には一本の橋が渡されていました。
172 172 城主殿がやって来て言いました —
173 173 城主殿の手には鷹がとまっていました。
174 174 ありがたいことに私にお気づきになったのです —
175 175 『馬をお降りになり、今夜はここでお過ごください。
176 176 あらゆるお世話をいたしましょう。
177 177 この喜ばしい時は祝福されるべきでしょう。
178 178 あなたが私のもとへと導かれたのですから。
179 179 当城ではあなたは私にとっても神にとっても喜ばしい客人です。
180 180 馬からお降りになって、休息をお取りください。』
181 181 夕の速い時刻、陽の光がある時でした、
182 182 私がこの城に馬で辿り着いたのは。
183 183 城主殿は礼を尽くして私を迎え、
184 184 自ら私を上階へと導かれました。
185 185 城館の前には板が掛かっていました。
186 186 それは色とりどりの銅で出来ていました。
187 187 板のところには槌がありました。
188 188 その槌で板を叩くと、
189 189 館の騎士たちが走り始め、
190 190 互いに大声で言い合いました。
191 191 『皆で殿のところへ行き、
192 192 礼を尽くして殿のお客様を迎えるのだ！』
193 193 騎士たち、小姓たちは私から馬を引き取り、

194 194 まさにこの上ないやり方で迎えました。
195 195 その時に姫君とお会いましたのです。
196 196 姫君のことは私の頭からも
197 197 心からも全く消えておりません、
198 198 私が世界のどこにしようとも。
199 199 心やさしい姫君は私に
200 200 心を込めてこの世の喜びを与えてくださいました。
201 201 すばらしいことに姫君は
202 202 私の甲冑を外してくださったのです。
203 203 そして衣服を用意させてくださったのですが、
204 204 それは騎士であれば着ることが榮譽であるようなもので、
205 205 深紅の毛織物と純白のオコジョの毛皮からできていました。
206 206 純金でできた豪華な飾りに
207 207 高価な宝石が埋め込まれているものを
208 208 私にこの清き姫君はくださりました。
209 209 そして私を隠し部屋にお連れになりました。
210 210 その部屋は薔薇と百合で埋め尽くされており、
211 211 黄色と緑の香草もありました。
212 212 私はこれこそ現世の恵みだと思いました。
213 213 私はその香りの中に留まっていたと思いました。
214 214 そこに座っているのは私の恋人だと思いました。
215 215 すると皆は私たちのところから去り、
216 216 私たち二人が残るだけになりました。
217 217 そこで私は私の恋人に語りかけました。
218 『私がこの世の喜びを得るかどうか、
219 それはあなたのお気持ち次第です。
220 218 どうか、お姫様、私の気持ちをお聞き入れください。』
221 その時の私の喜びはあまりに大きく、
222 私はそれがこの世で一番すばらしいことだと思いました。
223 219 私の願いは
224 220 そこに一生留まることでした。
225 221 しかしとても残念なことに
226 222 城主殿が戻って来られました。

- 227 223 城主殿は私たちに晚餐を勧めました。
- 228 224 『こちらへおいでください。』
- 229 225 私たちは城主殿に同意し、その勧めに従いました。
- 230 226 城主殿は私たちに本当に考えられるかぎりのもてなしをされ、
- 231 227 野生の肉、家畜の肉、あらゆる菜を供されました。
- 232 228 そして私たちに葡萄酒や果実酒を振舞われ、
- 233 229 そしてさまざまなおもてなしをされました。
- 234 230 神様、城主殿のおもてなしをお報いください。
- 235 231 城主殿は私たちが
- 236 232 私の心づもりについて語り合っているところで
- 237 233 帰り途でも同じ道を来るようお求めになりました。
- 238 234 城主殿は私を居城で待っている旨言われました。
- 239 235 『私の知る限り、ずっとなかったことです。
- 240 236 あなたのような騎士がここへ立ち寄り、
- 241 237 エーヴェンチュール
冒 険を求めに行くようなことは。
- 242 238 何か入用なものがあれば、おっしゃってください。』
- 243 私は城主殿より受けた榮譽の礼を言い、
- 244 また来たいと思っていることを申し上げました。
- 245 239 出立を求める気持ちが出てきたのです。
- 246 240 私は暇乞いをし、床に着きました。
- 247 241 陽の光が現れたとき
- 248 242 私の馬は出発の用意が出来ておりました。
- 249 243 私は皆に心づくしの礼を言い、
- 250 244 晴れやかな、明るい心で出発しました。
- 251 245 少しばかり馬を進めると、
- 252 246 私のほうへと
- 253 247 野牛や野の獣たちが走って来ました。
- 254 248 獅子、熊、豹が
- 255 249 たいへんな叫びを上げて争っていたので
- 256 250 私は恐ろしくなって逃げたくなりました。
- 257 251 そこで私は踵を返しました。
- 258 252 すると恐ろしい光景が眼に入りました。
- 259 253 黒人よりも黒い牧童が現れたのです。

260 254 それまでに眼にしたことがないほど身の毛のよだつ姿でした。
261 255 その牧童は手に一本の槍を持っていました。
262 256 それは鉄でできており、太く、長いものでした。
263 257 その姿はまるで妖怪のようで、
264 258 馬の頭より大きい頭をし、
265 259 駱駝のような曲がった首をしていました。
266 260 その身の毛のよだつ姿については語りたくなかったのですが、
267 261 頭髪は茨の棘のように鋭く、
268 262 鼻は山羊の角のように曲がっておりました。
269 263 眼はトパーズのように黄色く、
270 264 それは怖ろしい光を発していました。
271 265 口は広く、唇は青く、
272 266 顎は胸の下のほうまで達し、
273 267 肌は熊のよう、
274 268 猪のような歯、猿のような頬を持ち、
275 269 鋭い髭が絡み合い、
276 270 背は広く、瘤だらけで、
277 271 足は幅広く、長い割れ爪をはやしており、
278 272 豚のような爪は曲がっておりました。
279 273 男は槌に寄りかかっており、
280 274 細く、長い脚をしておりました。
281 275 その衣服は奇妙なもので、
282 276 金のかからないもので立派に誂えてありました。
283 277 纏っていたなかで最も華やかな服は
284 278 二枚の牛皮を合わせたもので、
285 279 帯状に断たれており、
286 279 それが体の周りを揺れていました。
287 281⁹ 私がこの男のところへと馬を駆るのを見ると、
288 282 彼が私を待つようなことはないと思ったのですが、
289 283 8 エレもある木の株に飛び乗ると、
290 284 棍棒に身を寄せて立ちました。

⁹ Liffman/Stephens 版では第 280 行があるが本稿では割愛する。

- 291 285 私には何もことばを投げかけませんでした。
- 292 286 それがどういう意味なのか、私にはわかりませんでした。
- 293 287 彼のまなざしは恐ろしく、
- 294 288 私を震え上がらせるような感じでした。
- 295 289 私はいろいろと考えました。
- 296 290 どんなことをすれば
- 297 291 落ち着いて
- 298 292 この男が怒っても平然としていられるだろうかと。
- 299 293 私はこの男は狂人なのだろうと思いました。
- 300 294 男は私がそこにいても何も言わなかったからです。
- 301 295 そして私は思い切って足を進め、
- 302 296 どんな冒^{エーヴェンチュール}険が得られるのか見極めようと思いました。
- 303 297 私は意を尽くして言いました。
- 304 298 『言ってくれ、お前が誰なのか、
- 305 299 お前は善人なのか、悪人なのか、
- 306 300 なぜここでそう何も考えず立っているのか。』
- 307 301 男は言いました。『俺は人間。
- 308 302 これよりましな格好をすることはない。
- 309 303 今ここでお前が見ている姿が一番まともな姿なのだ。
- 310 304 俺の姿はもう見せた。』
- 311 305 『友よ、ここで何をしているのだ？
- 312 306 良かったら教えて欲しい。』
- 313 307 『俺は日がな一日
- 314 308 ここらを歩き回っている動物たちの番をしている。』
- 315 309 『わからない。どうしたら
- 316 310 こんなところで動物たちの番ができるのだ？
- 317 311 動物たちは野生で、ここは荒地だし、
- 318 312 綱でしっかりつないでもいないのに。』
- 319 313 『言うておくが、実際のところ
- 320 314 動物たちは俺になついているのだ。
- 321 315 いろいろと術を尽くして
- 322 316 奴らが逃げていかないようにしたのだ。』
- 323 317 『それでは折り入って頼むが、

337 331 『私は騎士。旅をし、
338 332 私の心が惹かれるものを探している。
339 333 どこへ行けば冒^{エーヴェンテュール}険をし、
340 334 名誉を得ることができののかが知りたいのだ。
341 335 さあ心の友よ、頼む、
342 336 言って欲しい。
343 337 どこへ行けば私は自分の力を示し、
344 338 名誉を高めることができるのだろうか。』
345 339 『あんたに一つ冒^{エーヴェンテュール}険の種を教えてやろう。
346 340 隠すこともないだろう。
347 341 ここから少し行くと泉がある。
348 343¹⁰ お侍さんよ、言うておくが、
349 344 そこへ行こうとするんなら、
350 345 恐ろしい目に合わずに帰ることはできないぜ。
351 346 ここに見えるこの道、
352 347 その行き先はあんたが
353 348 件の泉を見つけるところだ。

¹⁰ Liffman/Stephens 版では第 342 行があるが本稿では割愛する。

- 354 349 その泉は周りが薔薇で囲ってある。
 355 350 その薔薇は魔法をかけられているから、
 356 351 厳しい冬になっても葉が落ちることはない。
 357 352 あたりは
 358 353 陽が差さないようになっている。
 359 354 この泉についてもう一つ有名なことは、
 360 355 氷のように冷たいということだ。
 361 356 泉のそばには黄金の桶がある。
 362 357 そこには実に見事な柱がある。
 363 358 鎖は長く、
 364 359 桶が水面に届く充分の長さがある。
 365 360 そのすぐそばには礼拝堂がある。
 366 361 それより美しい礼拝堂はどこにもない。
 367 362 その泉から湧き出る水を酌むといい。
 368 363 そうすればあんたはきっと冒^{エーヴェンテュール}険を手にすることができ
 する。
 369 364 その水を柱の周りにかければ、
 370 365 どういうことになるかきっとわかる。
 371 366 すると激しい冬が来て、
 372 367 地上の全ての鳥、
 373 368 獅子、熊、あらゆる動物が
 374 369 激しい雨にを怖れをなす。
 375 370 雨、雹、霜、雪、
 376 371 恐ろしい炎が、本当に、
 377 372 そこですさまじい轟音と共に荒れ狂うさまは
 378 373 情け容赦ないものだ。
 379 374 もしそこから逃げおおせられ、
 380 375 無傷でいられたら
 381 376 神様がそんな幸運を恵んでくださるなら、
 382 377 あんたは誰よりもついていたということだ。』
 383 378 牧童は私に別れを告げました。
 384 379 私は答えました。『さらば！
 385 380 もうすぐ日が暮れる。

- 386 381 これ以上お前のそばに留まっている気はない。』
387 382 少しばかり馬で行くと、
388 383 本当に美しい森が見えてきました。
389 384 それほど美しい森は誰もそれまで見たことがなかったでしょう。
390 385 それは件の男が言っていた泉のそばでした。
391 386 偽りなく申し上げますが、
392 387 その泉は花と葉で覆われており、
393 388 私の考える限り雨が降っても
394 389 水が漏るようなことはなさそうでした。
395 390 森の中で私が見たのは
396 391 輝く黄金の桶でした。
397 392 世界中を捜しても
398 393 そんな光景には出くわさないでしょう。
399 394 本当のことですが、
400 395 泉から水が湧き出るさまは
401 396 火にかけられた鍋から
402 397 湯があたりに吹き出るようでした。
403 398 泉の柱はエメラルドできており、
404 399 意を尽くして作ってありました。
405 400 柱の根元には4つのルビーがありました。
406 401 それらは陽の光のごとく赤く、清らかでした。
407 402 そこで眼にした大変な光景について
408 403 詳しくお話することができますし、
409 404 お隠しすることもございません。
410 405 そこへ行けば誰でもそれを体験することができます。
411 406 私はそこに掛かっていた黄金の桶を取り、
412 407 泉の水でいっぱい満たし、
413 408 そしてその水を柱にかけました。
414 409 そうしたことを悔やんでおります。
415 410 と言うのもそこで嵐と轟音が巻き起こり、
416 411 空と天は雲に覆われ、
417 412 雨が恐ろしく降り始め、
418 413 あたりには炎が飛びかい、

- 419 414 雹も霜も途切れることがなかったからです。
420 415 私はそこにある全てのものが破壊されると思いました。
421 416 私は怖れのあまり苦しくなり、
422 417 まるで死んでしまったかのようにそこに倒れてしまいました。
423 418 主の恩寵がなければ
424 419 すぐさまそこで命を失っていたことでしょう。
425 420 倒れる樹の下敷きになって。
426 421 だから私は主に祈りを捧げて感謝したいと思います。
427 422 世界中を支配し、
428 423 恵みをもって私をこの危険から救い出してくださった主に。
429 424 しばらく朦朧として横たわっていると
430 425 耳に再び小夜鳴鳥や
431 426 他の鳥たちの優しい声が入ってきました。
432 427 私の心は明るくなり、落ち着きました。
433 428 明るくなり、太陽が輝いていることがわかった、
434 429 怖れは全て心から消えました。
435 430 するとそこで見えたのは一群の鳥が
436 431 空いっぱい広がって飛んでいるさまでした。
437 432 鳥たちはこの上なく優しい声で鳴いていました。
438 433 私は死ぬまでその光景を忘れないでしょう。
439 434 鳥たちの声は一羽ごとに違っているようでいて
440 435 みな同じようでした。
441 436 そのような歌は他にはどこにも見つからないでしょう。
442 437 そこでしか聞くことはできないのです。
443 438 その光景があまりに素晴らしかったので
444 439 まるで天国のようだと思いました。
445 440 私は鳥たちの歌声をずっと聞いていて
446 441 その音に落ち着かなくなりました。
447 442 そこで私は別のできごとに気づきました。
448 443 武装した騎士が一人馬を駆ってそこへ来たのです。
449 444 その騎士は勇ましく、勇敢に馬を駆っていたので
450 445 私は十人の騎士が来たと思ってしまいました。
451 446 彼が一人だと見て取ると、

452 447 私も自分の馬に急ぎました。
453 448 私は馬の背に飛び乗り、駆け出しました。
454 449 心は明るくなっていました。
455 450 栄誉が私の手に入るように
456 451 誰かが私の手助けをしようとしてくれていたからです。
457 452 そこで私が馬を駆るのを見た騎士は
458 453 大声をあげ、私に停まるよう言いました。
459 454 騎士は怒り狂っており、
460 ずっと離れたところからでもその声が聞こえました。
461 騎士は激怒しながら大声で
462 私がどのようにそこへ来たのかを尋ねました。
463 『貴様、全くつまらぬことをしてくれたな。
464 455 さあ、しっかり償うのだ。
465 456 私に対して償いをする事ができるなら
466 457 とくに害は加えずにしよう。
467 458 不遜な行いをしたのだから
468 459 それを見過ごすわけには行かぬ。
469 460 この森の姿を見ればよくわかる、
470 461 私がどんなにひどい迷惑を受けたか。
471 462 その埋め合わせをしないのならば
472 463 目にももの見せてくれよう。
473 464 私は引き下がりなどせぬ。
474 465 どちらかが死して倒れるだけだ。
475 466 ここでその方が私に与えた恥辱のため
476 467 私はとにかく嘆くしかない。
477 468 私は城内に留まることなどできなかった
478 469 雹と霜と炎のために。
479 それまで上機嫌であった貴婦人、乙女たちに
480 貴様は怖れと害をもたらしたのだ、
481 雪と嵐と激しい雨で。
482 塔も城壁も役に立たなかった。
483 470 貴様が力を示すためにしたことは、
484 471 逃げおおせるまえに償わねばならぬ。』

485 472 こう言ったあとその騎士は口をつぐむと、
486 473 槍を私のほうへと向けました。
487 474 その馬は狩網の竿のようにまっすぐと走りました。
488 475 これほど機敏な騎士は見たことがありませんでした。
489 476 私は慌てて楯を前に上げました。
490 477 どうにか攻撃をかわせました。そうする必要があったのです。
491 478 両方とも馬を力の限り走らせ、
492 479 私の槍は相手の騎士の兜に当たって砕けました。
493 480 その後は私はかの騎士にはとうていかなわず、
494 481 騎士は私を馬から地面へと突き落としました。
495 482 騎士は私の馬を奪うと馬を駆って去りました。
496 483 私はこれほどの恥辱を受けたことはありませんでした。
497 484 私の名誉など気にもとめぬようで
498 485 私のほうへ目をやるようなことは決してしませんでした。
499 486 それも不思議はありません。
500 487 彼が勝者だったのですから。
501 488 私に何かやりようがあったのでしょうか？
502 489 駆る馬もないというのに。
503 490 日はすぐに暮れ、晩となりました。
504 491 私は再び例の泉へと行きました。
505 492 するとそこからも立ち去りたくなってきました。
506 493 どこへ行くべきかわからなかったので
507 494 例の森へと戻りました。
508 495 件の城主殿のことが思い出され、
509 496 そこで助けを得、
510 497 何か助言をもらおうと思ったのです。
511 498 私は恥ずかしい思いで城へと入りました。
512 499 それも恥辱と不名誉のため。
513 500 それが起こったのは同じ日です。
514 501 朝にはその城から出発したのでした。
515 502 そこで私は件の城主殿を見つけました。
516 503 城主殿は礼を尽くし
517 504 親切に私を出迎えました。

518 505 私の苦勞の手当てを全てしてくれました。
 519 506 『ここにいらしたことは神様にも、私にも喜ばしいことです。
 520 507 ここでできる限りのことをいたしましょう。』
 521 508 そこで私が見たのは他でもなく
 522 509 貴婦人たち、乙女たち、雅な婦人たちでした。
 523 510 婦人たちが私にくださった榮譽の大きさは
 524 511 私が始めてそこへと来たときと同じでした。
 525 512 騎士たち、小姓たちも同じようにしてくれました。
 526 513 全能の主よ、彼らにその褒賞をお与えください。
 527 514 城にいた全ての者は
 528 515 不思議がりました。私がどのようにしてそこまで来たかとい
 うことと、
 529 516 私が幸運にも
 530 517 死にもせず、囚われの身にもならなかったことを。
 531 518 誰も教わったことも、話を聞いたこともなかったのです。
 532 519 あの場所から誰かが生きて帰ったような話は。
 533 520 私がかの泉の所で見たことは
 534 521 皆様に申し上げた通りで、
 535 522 何ひとつ付け加えておりません。
 536 523 信じないなどと申さないでください。」

第四章 (冒険への出発)

537 524 「何ということだ」騎士イヴァンは言いました。
 538 525 「従兄弟よ、面白くないぞ、
 539 526 私にこれまで聞かせなかったとは。
 540 527 泉のほとりで起こったことを。
 541 528 そのことを真剣に考えていれば
 542 529 すでに私にそのことを話していたはずだ。
 543 530 神が私に命と力を与えてくださるなら
 544 531 私は立派にきみの恥をそそぐだろう。
 545 532 例の騎士に当然の苦しみを与えるか

- 546 533 私がそのために死して横たわるかだ。
547 534 そのために命を賭けよう。
548 535 そしてその騎士はずっと後悔し続けることになるだろう。」
549 536 すると騎士ケイエが言いました。
550 537 「おわかりか、
551 538 イヴァン殿は自分のお力を誇っておられるが、
552 539 それは頭がぶどう酒でいっぱいになっているからだ。
553 540 銀でも金でも賭けて今決闘する気なら
554 541 誰でもイヴァン殿に勝てる。イヴァン殿はへべれけだからだ。
555 542 ペルセファル殿とベルンのディデリク殿を
556 543 両方とも今イヴァン殿は倒したいと思っておられる。
557 544 イヴァン殿が今晚どんなに立派に戦ったとしても
558 545 明日には何にもならないのだ。
559 546 敬愛なる騎士殿、ご出立はいつですか？
560 547 ここではっきり我々におっしゃってください。
561 548 今夜はここでお休みになられたいのか？
562 549 お妃様がお尋ねなのはそのことだ。
563 550 今夜はいい夢を見るだろうが、
564 551 そんな夢など恐怖のあまり忘れてしまうだろう。
565 552 この午後にお発ちになるようなことにしても
566 553 赤騎士ワデインは貴殿を待ってなどいないだろう、
567 554 実際に彼が
568 555 貴殿が今それほど猛っていることを知れば。
569 556 我々は結局みんな
570 557 貴殿に明日もここで作法どおりご挨拶することになるのだ。」
571 558 お妃様はそこでケイエに言いました。
572 559 「あなたの心は今ごろ引き裂かれていたところでしょう、
573 560 あんな皮肉をさっき言っておかなかったら。
574 561 私たちが今みな聞いたような皮肉を。
575 562 あなたは頭のおかしな厄介者なのでしょう。
576 563 どんな人にもあなたは失礼なことを言おうとする。
577 564 あなたの穢れた舌などどこかへ行ってしまうがいい！
578 565 その舌のためにつまらぬ思いをした日が何度あったでしょう。

579 566 あなたは我慢が決してできないのですから。
580 567 あなたは皆から憎まれても仕方ありません。」
581 568 騎士イヴァンはその時立ち上がりました。
582 569 「神様がご存知です、お妃様」と言いました。
583 570 「私はケイエのことばなど気にしておりません。
584 571 ケイエが騎士らしいかどうか、
585 572 はっきり申し上げましょう、
586 573 きっとケイエ自身がわかることなのです。
587 574 ケイエは自分の舌を黙らせることはできないのです。
588 575 自分がいつも人の悪口を言いたいのですから。
589 576 自分が仕える主人の名誉を尊重したいと思う者は
590 577 充分に心をはらって
591 578 ことばを選び、せいてはならないものです。
592 579 そうすればどこへ行っても軽んじられないことでしょう。
593 580 ケイエ殿がそうしようとされていたら
594 581 大変な栄誉を得たことでしょう。
595 582 しかしはっきり言っておこう
596 583 もし私が思い違いをしていないなら
597 584 お前と争う必要など私にはないのだ。
598 585 お前が私にどれほど失礼を働くとしても。
599 586 お前のことばなど何の意味もない。
600 587 お前自身もまったく眼中にないのだ。」
601 588 こんな話が終わったところで
602 589 王が歩いて来られました。
603 590 するとすぐさま皆は王の方へ向いて立ち上がり、
604 591 奉仕を申し出ました。
605 592 王はお妃様のそばに腰を下ろされました。
606 593 「皆の者、いいか！
607 594 騎士たち、小姓たちよ、腰を下ろすがいい。
608 595 私はここで語られているのがどんな話か知りたい。
609 596 妃よ、話してくれないか、
610 597 騎士カーレグレワントがここでした物語を。」
611 598 お妃様は雅びで明るい心の持ち主であったので

- 612 599 すぐさまそこで物語を語り、
 613 600¹¹ カーレグレワントの苦難について激しく嘆き、
 614 601 語らずにおくことは一つありませんでした。
 615 602 「この騎士が甘んじなければならない苦しみをお考えください。
 616 603 この騎士が嘆かねばならない恥辱をおそそぎください。
 617 604 陛下はご存知のはずです。
 618 605 そうなされば栄誉と賞賛をお受けになられます。」
 619 606 王がこのことばを聞いたとき、
 620 607 さて、何が起こったでしょう？
 621 608 王はそこでみごとに誓いを立てたのです。
 622 609 と言うのも、王は怒りを感じたからです。
 623 610 父王ウテルパンドラゴンの霊にかけ、
 624 611 ー 王は父王をととても愛していました ー
 625 612 そして母の霊にかけ、
 626 613 そして彼の愛する兄弟たちの霊にもかけ、
 627 614 件の泉へと行き、
 628 615 騎士たちと貴婦人たちを引き連れて
 629 616 十四の夜が過ぎる前に
 630 617 赤騎士ワデインの客人となることを。
 631 618 皆喜びました。
 632 619 王がこのようにしようとお考えになったことを。
 633 620 騎士達、小姓たちは喜んでいましたが、
 634 621 ひとり騎士イヴァンだけは違った気分でした。
 635 622 と言うのも彼はぜひとも一番乗りをして
 636 623 どの騎士よりも早く敵地に行き、
 637 624 なんとかして
 638 625 エーヴェンデュール冒 険を手に入れたと思ったのです。

¹¹ Liffman/Stephens 版では第 610 行が第 612 行、第 620 行が第 622 行、第 630 行が第 632 行として挙がっているが、誤植なので本稿では正しい行数を記入する。

第五章
(赤騎士ワデインとの戦い)

639 626 騎士イヴァンはそこでひとり赴きました。
640 627 自分の小姓たちのいるところへと。
641 628 騎士イヴァンはひとりの小姓を密かに呼び寄せました。
642 629 他の小姓たちはそこに残されました。
643 630 「すぐに私の乗用馬に鞍をつけるのだ！」
644 631 その小姓は言われた通りにしました。
645 632 「私は先に道を行き、
646 633 そこで隠れてお前を待っている。
647 634 私の戦闘馬はお前が後から連れてくるのだ。
648 635 私の武具一式もな。
649 636 乗用馬はお前がまた連れて帰れ。
650 637 小姓なしで行くつもりだ。
651 638 誰にも言ってはならないぞ、
652 639 私がここからどこへ行くつもりかは。」
653 640 「お疑いにならないでください。
654 641 おっしゃる通りにいたします。」
655 642 騎士イヴァンは乗用馬にまたがって出立し、
656 643 隠れ小道と短道を通りました。
657 644 小姓は騎士イヴァンが命じた物を全て携え、
658 645 できるかぎり急いでやって来ました。
659 646 「私がこうやって密かに出発するのは
660 647 ケイエ殿のせいなのだ。
661 648 私はケイエ殿に冒^{エーヴェンテュール} 険を得させたくない。
662 649 私はいつも冒^{エーヴェンテュール} 険を求めているのだ。
663 650 ヴァリヴァンであれケイエ殿であれ
664 651 ー はっきり言っておきたい ー
665 652 そのどちらかが冒^{エーヴェンテュール} 険を得たいと願い出たら
666 653 アルトゥス様はすぐにそれを許してしまっただろう。」
667 654 騎士イヴァンは武装すると出立しました。
668 655 険しい道と暗い径を通り、

- 669 656 高い山と深い谷を越えて。
670 657 それにはとても骨が折れました。
671 658 道は暗く、光などありませんでした。
672 659 その道を辿ると件の館につきました。
673 660 そこで騎士イヴァンは高貴な乙女を見つけました。
674 661 すでに皆様に申し上げた乙女です。
675 662 騎士イヴァンはここにいたとしても言い尽くせないでしょう
676 663 その館で得たあらゆる榮譽
677 664 かの美しく、輝くばかりの乙女については。
678 665 その乙女の高貴な育ちはみごとなものでした。
679 666 騎士イヴァンがそれまでこの世で捜し求めたものの中でも
680 667 その乙女に比べうるものは見たことはありませんでした。
681 668 どの土地であっても、高貴さと誉の両方に関して。
682 669 実によくわかったのです。神さまが明るく、
683 670 晴れやかな心持ちでいらして、不機嫌などでないことが。
684 671 このような乙女を生まれさせたのですから。
685 672 神さま、この乙女の誉をお守りください。
686 673 そして御恵をお忘れにならないでください。
687 674 快適な宿を騎士イヴァンはその夜与えられました。
688 675 翌朝、騎士はいそいでそこから出立しました。
689 676 小さく、細い径を通して。
690 677 そこで猛る獣たちが眼に入りました。
691 678 そして件の農夫を見つけたのです。
692 679 例の人間よりも化け物に似ている農夫です。
693 680 騎士イヴァンは十字を切りました。心臓は震えていました。
694 681 それはまさに悪魔のように思えたのです。
695 682 騎士イヴァンは泉への道を尋ねました。
696 683 「お侍さま、泉はあっちです。」
697 684 そして騎士イヴァンは道を急ぎました。それが望みだったの
しです。
698 685 そこでは聞いていたものを全てを見つけました。
699 686 騎士イヴァンは例の桶を満たすと、
700 687 次に柱に水をかけました。

701 688 すると底知れぬ暗闇が沸き起こり、
702 689 どこに行っていていいかわからなくなりました。
703 690 あたりには霜に雪、雹に氷。
704 691 エーヴエンテュール冒険が得られるものと騎士イヴァンは確信しました。
705 692 暗闇が消え去り、光が戻ってくると
706 693 そこへ館の方から馬を駆って来たのです。
707 694 武装し、脚鎧に身を固めた一人の騎士が。
708 695 その身は戦士として立派なものでした。
709 696 その騎士はそこであまりに恐ろしい叫びをあげました。
710 697 まるで狂人のように思えました。
711 698 二人は馬に乗ったまま激しくぶつかりあったので
712 699 双方の槍が互いの身体に当たりました。
713 700 二人の槍は太く、しっかりしたものでしたが
714 701 碎けて地面に散らばりました。
715 702 そしてどちらも相手を地面に倒すことはありませんでした。
716 703 とは言え、落馬しないで大変でしたが。
717 704 赤騎士ワデインは脅威を感じました。
718 705 騎士イヴァンが彼の前で落馬しなかったことに。
719 706 「これまでこんな不名誉はあったためしがない。
720 707 私の槍を受けても落馬しない者がいるとは。
721 708 私は多くの騎士を鞍から突き落としてきたというのに。
722 709 あの槍を使って。」
723 710 二人はそこで剣を取りました。
724 711 その剣は贅を尽くしたものでした。
725 712 二人は互いに力の限り剣を交えたので
726 713 二人の兜からは火花が散ったのでした。
727 714 両者とも立派な騎士であることが示されたのです。
728 715 二人が嘆き苦しみながら挑んだ戦いによって。
729 716 二人は剣で互いの楯を粉々に突き、
730 717 互いに打ち倒し、
731 718 相手に傷を与えようとしてました。
732 719 二人がその場所から離れることはないとは思いました。
733 720 二人の剣は力の限り打ち当てられ

734 721 甲冑と兜は破れてしまいました。
735 722 私はそれまでこれほど難儀なことを聞いたことはありません。
736 723 この戦いはとても長く続いたのです。
737 724 両者共に立派な勇ましい騎士で、
738 725 どちらも相手から退こうとはしませんでした。
739 一歩たりとも。
740 二人の騎士魂がそうさせたのです。
741 726 二人は技をつくして剣を交えました。
742 727 二人は互いの馬には剣を向けませんでした。
743 728 それが二人に相応しい行いだったのです。
744 729 二人とも騎士らしくそうした行為は避けたのです。
745 730 そこで騎士イヴァンは優位に立ちました。
746 731 騎士イヴァンがワデインに一撃を与えると、
747 732 兜も頭も裂けてしまいました。
748 733 ワデインがそこで受けた一撃のためにです。
749 734 ワデインの甲冑は血で赤くなりました。
750 735 苦しみのためそこでワデインは逃げ出しました。
751 736 仕方がないことだったのです。
752 737 ワデインの命はもう長くありませんでしたし、
753 命に到る傷を負っていたのですから。
754 騎士イヴァンはそのことには全く気を払いませんでした。
755 738 ワデインはすぐさま馬を返すと
756 739 わき目も振らず逃げ出したのです。
757 740 城にいた者たちは不思議に思いました。
758 741 誰がこれほどあわてて来るのか、
759 742 これほど怯えて駆けてくるのかを。
760 743 そのうちにみなそれがワデインであることに気づきました。
761 744 彼らはそれが騎士ワデインであることがわかるとすぐさま
762 745 城へと招じ入れました。
763 746 騎士イヴァンの望みは
764 747 ワデインから離れず、
765 自らが相応しい榮譽を得ることでした。
766 自分の従兄弟がそこで失った榮譽に相応しいだけの榮譽を。

767 748 騎士ワデインは苦しみに満ちた声を上げました。
768 749 道を逃げて行きながら。
769 750 騎士イヴァンはその後を追いました。
770 751 そこには騎士イヴァンには供も縁者もなく、
771 752 その時に頼れる者はありませんでした。
772 753 それでもワデインの後を追って城へ入りました。

第六章 (ワデインの城での危急)

773 754 城門は小さく、狭いものでした。
774 755 二人が同時に通ることはできませんでした。
775 756 上のところには落とし戸がありました。
776 757 それは匠の技でみごとにしつらえてあったのです。
777 758 それが下がっているのはとても危なかったのですが
778 759 騎士イヴァンはそこをなんとか通りました。
779 760 それは危険なことだったのです。
780 761 それで命を失うこともありえたのですから。
781 762 すると落とし戸が落ち、
782 763 ー 騎士イヴァンはそこで禍を受けたのでした ー
783 764 騎士イヴァンの足の拍車に当たり、
784 765 ー 皆様、それは危険だったのです ー
785 766 彼の見事な馬をすっぱり二つに裂いたのです。
786 767 そして二つの部分はそれぞれ倒れてしまい、
787 768 騎士イヴァン自身も地面に落ちました。
788 769 神様が騎士イヴァンを大きな死の苦しみから救われたのです。
789 門が騎士イヴァンに当たらず、
790 その命も失われなかったのですから。
791 770 騎士ワデインは騎士イヴァンから逃げようと走り、
792 771 主門を通り抜けました。
793 772 そこで自らの騎士たちが眼に入ると、
794 773 声を上げ、こう言いました。
795 774 「貴公たちの前で苦しみ之声を上げるのはつらいことだが、

- 796 775 一人の騎士が私をここへと追ってくるのだ。
797 776 その騎士が私をひどく傷つけたので
798 777 私の命はもうすぐ終わることになる。」
799 778 彼らがこうことばを交わしたところで
800 779 騎士ワデインは死に、馬から落ちました。
801 780 騎士イヴァンはうろたえていました。
802 781 城の者たちがすばやく門を再び閉じ、
803 782 二つの門の間に留まることになったからです。
804 783 騎士イヴァンはそこで危険きわまることになり、
805 784 そこから逃げられないと覚悟しました。
806 785 しかし自分の運に賭けようとしたのです。
807 786 そこにひとりの乙女がやってきました。
808 787 「立派な騎士さま、どうしてここにいらっしゃるのですか？
809 788 ご主人さまを殺められたのですね。
810 789 ならばここにいらっしゃるの危険です。
811 騎士さまは私たちにこれほどの苦しみをお与えになりました。
812 そのためにお命を落とすことがなければいいのですが。
813 790 奥方さまはたいへんなお苦しみようです。
814 791 そしてこの城の全ての者も。
815 792 ご主人さまが私たちを司り、
816 793 私たち全ての榮譽を守っていらしたのですから。
817 794 と言っても騎士さま、誰も騎士さまのことを忘れたわけでは
しありません。
818 795 ここにお隠れのことは皆よくわかっています。」
819 796 そこで騎士イヴァンは答えました。
820 797 「神様をご存知です、お嬢さま」と言った。
821 798 「全く違ったようにことが運ぶことをご覧になるでしょう。
822 799 私が捕らえられる前に。」
823 800 乙女はそこで騎士イヴァンに答えました。
824 801 「できる限りお助けいたしましょう。
825 ご安心ください。
826 ご自身で切り抜けられることでしょう。
827 802 私は騎士さまにご奉仕する借りがあるのです。

- 828 803 と言うのも騎士らしいご振る舞いと榮譽を
829 804 私、この哀れな娘にお示しくださったのですから。
830 805 私がアルトゥス王をお訪ねした時のことです。
831 奥方さまの密使として。
832 その時騎士さまが私にお示しくださった榮譽、
833 806 それを今まさにお話いたします。
834 807 それを思い起こし、お返ししたいと思うのです。
835 808 その時はどなたも宮廷に相応しいお振る舞いをしてくださらず、
836 809 私に騎士らしく接してくださる方が本当にいらっしやんなか
したのです。
837 810 騎士さまのお名前はよく覚えております。
838 811 騎士イヴァン様、ユリアン王のご子息。
839 812 さあ、心の底からお喜びになってください。
840 813 私の力がとてもお役に立つでしょう。
841 814 私の助言に従うのならば
842 815 何も禍はあなたに降りかかりません。」
843 816 乙女は不思議な力に詳しく、
844 817 騎士イヴァンに一つの指輪を渡し、
845 818 その指にはめたのでした。
846 819 その宝石はインドから来たものでした。
847 820 「この石にはとてもたくさんの不思議な力と名誉があります。
848 821 誰でもこれを身につけ、
849 822 握っていれば、ご覧にいれましょう、
850 823 誰の目にも見えなくなるのです。
851 824 今の危険を乗り切られたら
852 825 お願いします、
853 826 この宝石を私にお返しください。
854 827 もしよろしければ。」
855 828 「神様がこの素晴らしい贈り物を報われますように！
856 829 必要なものが今手に入ったのです。
857 無事に生き延びることができたら
858 生きている限りそのお礼をします。」
859 830 乙女はそこで騎士イヴァンに言った。

- 860 831 「さあ、急いでここから出て
 861 832 あの暗い館を通って行きましょう。
 862 833 あのたくさんの灯りが灯されているところです。
 863 834 その近くに隠れ場所があります。」
 864 835 騎士イヴァンは急いで乙女の言う通りにしたのです。
 865 836 乙女は騎士イヴァンを小さな寝室に導きました。
 866 837 「しばらくここで横になり、眠りをとって
 867 838 この寝台でお休みください。
 868 839 少しの間で、ずっとではありません。」
 869 その寝台はとても豪華なつくりで、
 870 高価な生地が使われており、みごとなものでした。
 871 840 ピロードと金糸まじりの絹を
 872 841 乙女はこの立派な騎士の上に掛けました。
 873 842 「さあ、ここで横になり、お休みください。
 874 843 何も禍は起こりません。
 875 その間食べ物を用意させます。
 876 皆の怒りはご心配にならないで結構です。」
 877 844 騎士イヴァンがしばらく横になっていると
 878 845 乙女がまたやって来ました。
 879 847¹² たくさんの食べ物を携えて。
 880 846 蜜酒、葡萄酒、すばらしい果酒も。
 881 848 乙女は騎士イヴァンに促して、すぐに卓に付き、
 882 849 食事を取り、飲み物を飲んで、くつろがせたのです。

第七章

(ワデインの妃との出会い)

- 883 850 ワデインの家来たちは主人思いで、その不幸を嘆き、
 884 851 騎士イヴァンを求めてあたりをくまなく探しました。
 885 852 城の内外を問わず。
 886 853 皆はしかし見つけることはできませんでした

¹² Liffman/Stephens 版では第 846 行と 847 行が入れ替わっている

887 854 騎士ワデインを打ち殺した騎士を。
888 855 彼らが騎士イヴァンを見つけられなかったのは結構なことです。
889 856 そこでかの美しく、清らかな乙女は言いました。
890 857 「騎士さま、私はおそばにおります。
891 858 あの者たちがどこへ行こうと決してお気になさらないように。
892 859 皆が内であれ外であれ何と叫んでも
893 860 それほど大きな音にはなりませんから
894 861 寝台からお逃げになることはありません。
895 862 ここにいらっしゃれば今すぐご覧になれます。
896 863 この城にいる者の皆を残らず
897 864 騎士たち、小姓たちともに。
898 865 皆騎士さまに目にも物見せようと思っています。
899 866 皆あんなに大きな嘆き声をあげて
900 867 愛するご主人さまのために涙を流し
901 868 その亡骸を担いで城の周りをうろつき、
902 869 そこで騎士さまを見つけようとしています。
903 870 ご覧になれば滑稽とお思いになるでしょう
904 871 激昂して彼らが城の周りをうろついている様を。
905 872 皆がどれほど探しても
906 873 騎士さまを見つけることはできないのです。
907 874 私はこれ以上ここに留まるわけには行きません。
908 875 騎士さまは神さまの手に委ねましょう。
909 876 私は心から神さまに感謝したい気持ちです。
910 877 と言うのも神さまが私に、この端女に下さったみ恵みなのです。
911 私が騎士さまにここでお会いしたのは。
912 私は騎士さまのために骨折るつもりです。」
913 878 乙女が騎士イヴァンのところから去ると
914 879 すぐ騎士イヴァンの耳に入ったのは
915 880 抜き身の剣が立てるととても大きな音でした。
916 881 幾人かは弓を、幾人かは槍を持っていました。
917 882 皆そこで一生懸命になって
918 883 すぐに騎士イヴァンを取り押さえようと思っていました。
919 それはまるで獅子が猛り狂っている様ようでした。

- 920 獲物を眼にしながら捉えられない獅子のような。
- 921 884 皆は激しく嘆いていました。
- 922 885 なぜこのような不幸なことになったのかと。
- 923 886 「あの騎士がここから簡単に逃げおおせるなどという
- 924 887 不思議なことはこれまで聞いたことがない。
- 925 城壁は高く、超えられないのだし、
- 926 我々が探し回っているのだ。」
- 927 888 皆は互いに大声で話し合いました。
- 928 889 「我々はみな頭がおかしくなったのではないか。
- 929 890 あの騎士が鳥でもあつて翼でも生えているのでなければ
- 930 891 この城壁を越えて逃げることはできない。
- 931 892 どの城門も閉じられていることだし。
- 932 893 だからこれは奇跡なのではないか。
- 933 894 そうでなければこれは悪魔の仕業だ。
- 934 895 悪魔には大勢が悪意からだまされたのだし。」
- 935 896 皆は城中を隅から隅まで探しました。
- 936 897 騎士イヴァンが寝ている寝台の回りもです。
- 937 898 城の者たちは騎士イヴァンに何度も触れたのですが
- 938 899 それでもその立派な騎士の姿が眼に入ることはありませんで
した。
- 939 900 皆が城内を捜し尽くし、
- 940 901 騎士の姿も声も見つからず、
- 941 902 無駄骨だったことがわかったとき、
- 942 903 あの美しい奥方さまがそこへやって来たのです。
- 943 神様は奥方さまのものより美しい顔立ちを造ることはありません
でした。
- 944 苦しみのあまり奥方さまは話すことも、人の話を聞くことも
できませんでした。
- 945 904 そこでの奥方さまのお声は悲しみに満ちたものでした。
- 946 905 苦しみと嘆きとたくさんの涙のためでした。
- 947 906 奥方さまは騎士ワデインの亡骸を見るやいなや
- 948 907 気を失ってくずれ落ち、横たわってしまいました。
- 949 近くにいた貴婦人達は

950 奥方さまに水を持って来させました。
951 908 奥方さまは再び気を取り直すとすぐに
952 909 悲しみに満ちた仕草で髪をかきむしりました。
953 910 騎士たちと小姓たちは奥方さまに願い出ました。
954 911 「我々はみな奥方さまのために働くつもりです。
955 912 高貴でお若く、雅な奥方さま、
956 913 すぐにお泣きになるのをおやめください。
957 914 使者を老若の僧たちにお出しになり、
958 915 殿さまの霊のために葬儀を執り行なわせください。」
959 916 床の真中には騎士ワデインの棺が置かれ、
960 917 貴婦人たちが悲しい心で運びました。
961 918 僧たちが死者のためにミサをあげているとき、
962 919 亡骸ははげしく血を流し、
963 920 血が床までしたたり落ちました。
964 921 そのとき皆は確信したのです。
965 922 同じ館の中に件の
966 923 騎士ワデインとの決闘に勝利した騎士がいることを。
967 924 皆が語ること、行うことを全て
968 925 騎士イヴァンはとても詳しく聴いていました。
969 926 皆はそこで再び搜索を始めました。
970 927 騎士イヴァンは恐ろしさのあまり汗が出ました。
971 928 皆は上から下まで探し回り、
972 929 納得しようとししました。
973 930 騎士イヴァンが見つからないことを。
974 931 神さま、このことの褒美をかの乙女にお与えください。
975 932 「何ということでしょう」
976 933 と高貴な奥方さまは言いました。
977 934 「悪魔の行い以外にありえません。
978 935 私たちがあの騎士を見つけられないのに、彼がここにいるとは。
979 いったいありえるのでしょうか。
980 男たちも女たちも盲になってしまうなんて。
981 936 在天の神さま、
982 937 私はこれほどの不幸には遭ったことはありません。

- 983 938 あの騎士を見つけられないとは。
984 939 あの騎士は私の心を悲しませたのです。
985 940 しかし私にははっきりとわかっているのです
986 941 あの騎士がこの館の中にいることを。
987 942 あの騎士が殿をだましたのでなければ
988 943 殿の命を取れるようなことはありえなかったはず。
989 944 殿より優れた騎士などけってして
990 945 — 殿は騎士としての鍛錬に手を抜くことなどありませんで
しした —
991 946 この時代に生を受けたことはありませんでした。
992 947 あの方は怖れなどに屈することはありませんでした。
993 948 あの方は決してあの騎士に遅れをとったり、
994 949 あからさまに立ち向かったりする必要はありませんでしたし、
995 950 あの騎士の前で勝利を逃すことなどあり得ないのです。
996 951 悪魔のわざが使われたのでなければ。
997 私たちはよくわかっているのです。
998 あの方ははるかに強い方です。」
999 952 皆は嘆きと苦しみから逃れられませんでした、
1000 953 亡骸を持ち上げると墓のところまで運びました。
1001 954 そこで亡骸を横たえると
1002 955 奥方さまは激しく嘆きました。
1003 956 「ここに横たわっているのは心から愛する方。
1004 957 代わりは二度と得られません。」
1005 958 そこで死者のためのミサが終わると
1006 959 奥方さまはたいへん嘆きながらその場を去りました。
1007 960 件の乙女は生まれにふさわしい徳があったので、
1008 961 騎士イヴァンを匿ったところまで行きました。
1009 962 「愛する騎士さま、お聞きください、
1010 963 そしてご覧ください、ここにいる者ども全て。
1011 964 皆あなたさまのことは見つけられません。
1012 965 このことは私ではなく、神さまに感謝なさってください。」
1013 「お嬢さま、神さまがご存知なのです。申し上げます、
1014 私はとても怯えていました。正直に申し上げます。

- 1015 966 私はこの危険な状況から救われました。
- 1016 967 それは神さまとあなたの慈悲心のおかげです。
- 1017 968 できることならお願いしたいのですが、
- 1018 969 奥方さまの姿を見ることはできますか。
- 1019 970 この館と皆の主人たる奥方さまのです。
- 1020 971 もしもご同意いただけるのなら。」
- 1021 972 乙女は次に申し上げるように答えました。
- 1022 973 「心から喜んでそういたしましょう。
- 1023 974 窓のところへ行きましょう。
- 1024 975 そうすればご覧になりたいお姿がご覧になれます。
- 1025 976 あそこで深紅の毛皮をまとして座っておられる
- 1026 977 その方が私の敬愛する奥方さまです。」
- 1027 978 騎士イヴァンは奥方さまに注意を凝らしました。
- 1028 979 奥方さまはその主人を忘れておらず、
- 1029 980 再び嘆き始めました。
- 1030 981 「このような騎士は他には知りません。
- 1031 982 私が失ってしまったような騎士のような。
- 1032 983 神さま、イエスさま、私をお助けください！」
- 1033 984 奥方さまはそのように言い、泣くと
- 1034 985 気を失って倒れ、ずっと横たわっていました。
- 1035 986 騎士イヴァンは立ち上がり、外のそのありさまを見ていました。
- 1036 987 「私があの方をお助けしなければ、私の恥になる！」
- 1037 988 騎士イヴァンは奥方さまのところまで走っていこうとしました。
- 1038 989 件の乙女は騎士イヴァンに対し大きな声を上げ、
- 1039 990 とても厳しい調子で言いました。
- 1040 991 「騎士さま、私の申すようになさってください。
- 1041 992 そしてここから出て行かないでください。
- 1042 993 さもないとひどいめにお会いになります。
- 1043 994 ここで私の考えるようになさって、
- 1044 995 お慌てにならないでください。
- 1045 996 遅かれ早かれご覧になります。
- 1046 997 ここで起こりうる冒^{エーヴェンチュール}険を全て。
- 1047 998 そして誰にも感づかれないのです。

- 1048 あなた様がここ、館の中で見つからずにおられることを。
1049 998 愚かなことをせずに生き延びたいのなら
1050 999 命をそのように無駄になさらないでください。
1051 1000 敵のいいようにされてしまいますよ。
1052 1001 皆あなたのことを一生懸命探しているのですから。
1053 私が申し上げたことをとくと思いだしになって、
1054 それについてたゆまずお考えになってください。
1055 1002 ここからはどこへもお出でになってはなりません。
1056 1003 私がご無事でいられるようにするまでは。
1057 1004 私はこれ以上ここにいるわけにはいきません。
1058 1005 神さまがあなた様の身と栄誉をお守りになられますように！
1059 1006 奥方さまにわからなければいいのですが —
1060 1007 奥方さまご自身でなくとも、他のご婦人でも —
1061 1008 私の何かの振る舞いでわからなければいいのですが。
1062 1009 私があなた様とこんなにも長い間ご一緒にいたことが。